

三遊亭圓朝と圓通堂（上）

二村 文人

はじめに

「近代落語の祖」と称される三遊亭圓朝（本名出淵次郎吉、天保十年～明治三十三年）は、明治二十一年から二十八年までの約七年間、東京府南豊島郡内藤新宿北裏町四八（現在の東京都新宿区新宿一の二一）に住んだ。六十二年の生涯のうち、数え年五十歳から五十七歳にあたる。新宿御苑の北側に位置する旧宅跡は、現在花園公園になり、昭和四十九年には区の文化財旧跡に指定されて、「三遊亭圓朝旧居跡」の記念碑（昭和五十年八月二十三日除幕）が建っている。新宿の家には圓通堂と呼ばれる離れがあつたが、その後移転を重ねた末に、昭和五十五年になって石川県金沢市に現存することがわかった。しかし、諸般の事情から、圓通堂は現在一般に公開されていないだけでなく、将来的に保存される見通しも立っていない。圓通堂には、「圓朝ゆかりの唯一の史跡」という意味が認められる。本稿では、資料として圓通堂の記録を残すとともに、圓通堂に象徴される新宿在任時代の圓朝とその周辺を、当時の新宿がどのような場所だったかということと併せて明らかにしたい。なお、圓通堂については『文学』増刊「圓朝の世界」（岩波書店、平成十二年）に、「圓通堂今昔」として経緯のあらましを述べている。

一 圓朝の新宿在住と圓通堂

圓朝が新宿へ転居したいきさつについては、鈴木古鶴の「圓朝遺聞」の「住居の事」に次のようにある。³「圓朝遺聞」は、春陽堂版『圓朝全集』の編集に中心的な役割を果たした鈴木行三（古鶴、明治十二年～昭和三十七年）が書いたもので、「この遺聞の資料は圓朝の生前直接圓朝に接して親交のあつた方々を歴訪して聞き得たものゝみであります」と断つてゐる。

約十年計りも此処（本所二葉町・引用者注）に居たが一子朝太郎の事で心を傷め、二葉町の住居も、残して置いて自分の亡い後継母と争など起つてはならぬと云ふ懸念から、売る必要もない家を売つて、其金を三分し、一は全生庵へ、一は福田会へ寄贈し、自分は残りの一分を持つて、一時神田佐久間町の俗に按摩横町へ借越をし、其頃茶の友達であつた質屋の隠居西東屋某氏の世話で、新宿北裏町四十八番地の家を買つて移り住む事になつた。この新宿の家にも圓通堂と名けた庵室やうのものがあつた。

新宿の住居も氣に入らぬ事はなかつたが、終ひには「下町へ行きたいね」とよく云ひ／＼してゐた。此頃新宿の家はそのまゝにして、一時四谷の荒木横丁辺に住んだ事もあつたといふ。新宿の家を売つてから（これは新宿の女郎屋の主人とかゝ買つたといふ事である）水道町即ち牛天神の下あたりへ借越をした。

全生庵は、明治十六年に山岡鉄舟が建立し、鉄舟と圓朝の墓所にもなつてゐる。福田会は、⁴福田会は、明治十二年四月に仏教各宗連合によつて設立された孤児養護団体である。⁴

「圓通堂と名けた庵室やうのもの」については、同じ「圓朝遺聞」に別項を立てて、以下のようにある。

圓通堂は新宿北裏町の住居に、別棟で廊下続きに往かれるやうに建てられてゐた離れで、茅葺で二疊と三疊と二間のものであつた。庭の方からは玉石を敷いた細い道を通つて行かれるやうになつてゐて、植込の間に「是より圓朝道」と彫つた石塚が立てゝあつた。藤浦氏の記憶によると、正面は茅葺の切妻で欄間には小窓があつて、そこに「圓通堂」と記した額が掲げてある。入口は一間で取附の二疊には、右手に仏壇があつて観音像が置いてあり、奥の三疊には机があつて其処で作をしてゐたといふことである。

「藤浦氏」は、圓朝顕彰会会長などを務め、父周吉（号三周）の代から三遊宗家として圓朝の名跡を預っていた藤浦富太郎（明治十八年～昭和五十五年）のこと。昭和四十年当時でも、圓朝の晩年を直接に知るほとんど唯一の存在だった。圓通堂に関する証言は、同氏との引用文の後に名前の上がっている初代橋ノ圓（明治三年～昭和十年、二代目三遊亭圓馬の実弟で十一歳の時に圓朝に入門）⁵によっていると思われる。

圓通堂には、作成された順に、次の四枚の図面が残る。

- ① 「圓朝遺聞」に載るもので、新宿にあつた頃の建物の見取図。
- ② 岡野知十「圓朝の禅室」に載るもの（後出）。
- ③ 『圓朝考文集』第一（昭和四十四年六月）に載る「出淵圓朝翁住居」（後出）。
- ④ 「伝三遊亭圓朝無舌居士遺愛茶席見取図」（後出）。

藤浦富太郎が記した「出淵圓朝翁住居」（図1）は、『圓朝考文集』の編者窪田孝司氏の斡旋により、原本が全生庵の所蔵になり、複写が区立新宿歴史博物館に収められている。同図には、「明治二十一年十一月より同二十八年二月迄／東京府南豊島郡内藤新宿北裏町四八／土地面積三百坪円朝所有地／建築、庭園の設計監督は円朝翁自身之に当る庭園の施工は宮内省御用の庭師鈴木半次郎であつた。／此の図は小生が六才位から八才頃の記憶を呼び覚まして描いてみたものだ。小供の頃の記憶だから多少の間違ひはあるかも知れないが、大体確だといえる自信がある。／昭和四十三年八月 藤浦富太郎（落款）」と付記されている。

新宿時代の圓朝の動向を年譜から拾うと、

- 明治二十五年五月、『塩原多助』が修身の教科書に掲載される。
- 同年七月、『怪談牡丹燈籠』が歌舞伎座で上演される。
- 明治二十六年、『名人長二』の創作にかかる。

などが目につく。また、明治二十四年六月には寄席への出演を取りやめており（「圓朝遺聞」）、書齋の人として過ごす時間が多くなつていたと想像される。明治二十五年九月に大阪の浪花座へ出演する際、大阪在住の門人二代目圓馬へ宛てた書簡に、「北裏の藪影、円通堂にて

無舌居士」「円通庵にて三遊」と記しているところからも、圓通堂は圓朝にとって精神のよりどころとして格別の意味をもつ空間だったのではないかと思われる。

圓通堂のその後については、「圓朝遺聞」の続きに、

この建物は転々して、今は小泉策太郎氏の有に歸して、南部坂の柯蔭精舎の庭園の一隅に（中略）全然独立した建物として保存されてゐる。今では茅葺が瓦葺に改められ、正面入口も上屋が付いてゐるので、全く趣を異にしてゐるが、内部は大體元の俣に組立てられたものらしくとある。⁹ 小泉策太郎（明治五年～昭和十二年）は政治家で、号を三申と言う。¹⁰

更に、永井啓夫氏は次のように述べている。

策太郎の令息伸五氏によれば、柯蔭精舎は大正十二年南部坂（港区麻布広尾町三三）に完成されたもので、邸内に茶室が二棟建てられていた。その一棟が円通堂であつた。¹¹

この邸はその後、桜井兵五郎（一八八〇—一九五二、石川県出身、政治家、実業家）の所有となり、のち中国大使館・ドイツ大使館を経て現在中国大使館となっている。旧建造物は昭和三十年頃、ドイツ大使館改築のため解体された。円通堂は桜井兵五郎によつて金沢市に移され、甥の桜井能唯が江戸村・慶楽寺に再建した。（『新版三遊亭円朝』）

但し、中国大使館に関する記述は誤りで、昭和二十九年にドイツ連邦共和国が大使館用地として取得して以降、現在まで所有関係に変更はないという。¹² また、「慶楽寺」は康楽寺が正しい（後述）。

新宿の家について、圓朝以前の持ち主や圓朝が購入した契機、圓朝が転居した後どうなったのかなどは、「圓朝遺聞」に書かれている以外のことはわからない。

二 岡野知十「圓朝の禪室」

麻布時代の圓通堂については、俳人岡野知十（万延元年～昭和七年）が『郊外』第七卷第四号（大正十五年九月）に「圓朝の禪室（図入）

「附け、とり交ぜ雑載」として探訪記を載せている。「圓朝の禪室」は、

一、圓朝の禪室

二、襖の張りませ

三、圓朝の伝記

四、圓朝の余事

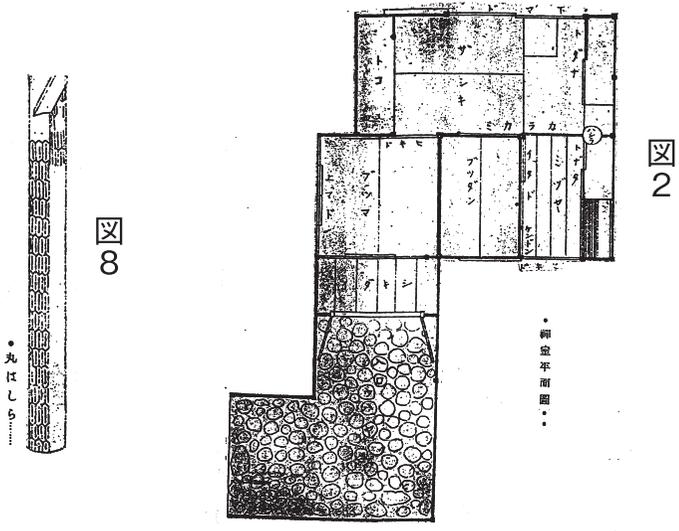
五、圓朝対面

から成る。「圓朝の禪室」には、「禪室平面図」(図2)と、日本画家小村雪岱(明治二十年〜昭和十五年)の描く「玄関」(図3)、「仏間の一」(図4)、「仏間の二」(図5)、「座敷の一」(図6)、「座敷の二」(図7)、「丸はしら」(図8)、「みづや」(図9)の挿絵が添えられている。「圓朝の伝記」には、信夫恕軒の「三遊亭圓朝伝」の全文と、関根黙庵の『講談落語今昔譚』を引用し、『粹興奇人伝』(文久三年)の歌川芳幾による圓朝の肖像画を載せる。¹³「圓朝の余事」では、筆跡や俳句に短く触れるほか、俳句を書いた短冊と、「古師三遊亭圓朝」と記す料亭「柳光亭」の引札(広告)の文章を載せている。また、「圓朝対面」には、知十が函館新聞社に勤務していた明治十九年に、内務大臣山県有朋と外務大臣井上馨の北海道視察旅行に随行した圓朝の訪問を受けたときの印象を記している。¹⁴なお、「圓朝対面」の前後には、「圓朝肖像」と木立の奥に見える「禪室背面全景」の写真を掲載している。

『郊外』が既に稀覯の資料になっているので、ここに「圓朝の禪室」と「襖の張りませ」を転載する(必ずしも歴史的仮名遣いによっていないところがある。また、「圓朝」と表記する以外、新字体に改めた)。

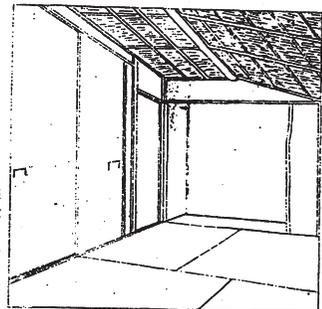
一、圓朝の禪室。

麻布南部坂の柯蔭精舎は、敷地四千坪、建坪三百余坪。宏壮な邸宅である。和洋の間毎は、古仏像、古仏画、古経巻を以て飾られ、この類の蒐集にては、当世匹儔がないといはれる。私はその堂に入り、その前に坐せは合掌(あはむか)しないではないが、鑑賞の上からは一向修養がないので、空しく眼に過ぎて仕舞ふばかりである。

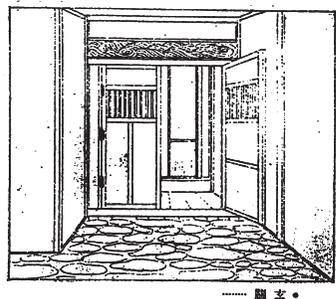


丸はしら

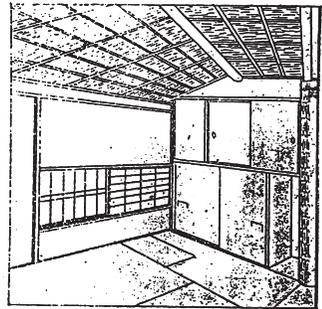
御堂平面図



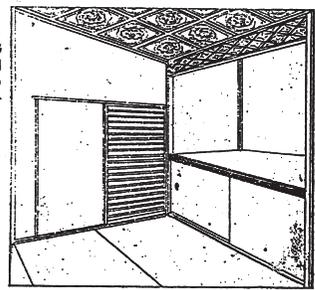
座敷の一



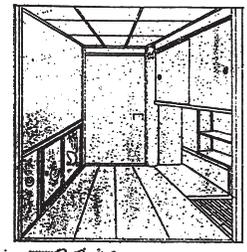
圖玄



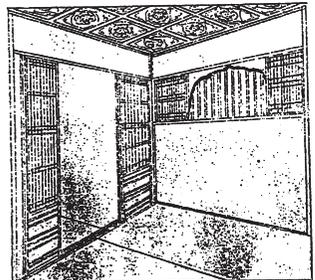
二の座敷



佛間の一



ヤブみ



佛間の二

この大邸宅の庭の西隅に、三坪に足らぬ建物がある。私の趣味からいへば、これは奈良鎌倉の古く且つ大なる遺宝よりも、この矮にして小なるものゝ方が面白く思はれる。

この小建物は、元は内藤新宿の北裏町にあり、三遊亭圓朝が住宅の一部であつた。圓朝は、古くは本所南二葉町に住み、それよりここに移り、さらに牛込新小川町へ移つたのであるが、この新宿の住宅を買つたものが、これを又売却するといふ時、三申さん——私は三申さんとばかりいつて居ます、しかし世間には小泉策太郎といへば、さらに知らぬ人はなからう。——がこの別室だけを買取られて、ソツクリほごして。久しくそのまま保存して置かれ、それをこの庭へ建てられたのである。三申さんは妙に建築に興味深い。こつしマツた古材を買つては保存され、それを随時に用ゐられる。書画とか骨董なら格別、建築用の古材を買つて置かれるといふのは、よほど建築好きでなくては出来ぬ道楽である。

この圓朝の古屋を引とつたのはなしも、聞いてからも二十二年ちかくにもなる。それがはじめてこの柯蔭精舎の庭へ建てられたのは、震災後のことである。構造は本のまゝ少しもかへられぬ。たゞ入り口は直に元の玄関では、庭に置くとしては、景色が整はぬので、それにふさはしい古材で玄関さき土間の上に上屋をつけ足された。元は萱葺きであつたが、建築規定がむづかしいので、瓦に葺きかへられたが、この瓦がチト重くるしい。それは自分の好みとはちがつたといはれる。この修理は奈良から呼んだ工匠の手に成つたのである。こつした建築物のはなしを、サア圓朝のやうな話し上手で、これがこのやうな好みの面白い間取から用材用具万事に通じて、細かに説き明したなら、わかりよく呑みこめもしようが、私にはさう細かにはなすほどの普請についての知識がない。そこで小村雪岱さんをおたのみして、わかり易きやうあらましの図を作つてもらひ、加藤新一さんには写真にしまつた。

玄関トいふよりも、式台を上ると、ソレは二畳の仏間である。この式台の上り鼻の障子は、それは六尺一間に小壁をとつて、障子四枚といふのも、いかにその障子の細いかが思ひやられやう。墨塗りの細縁で丁度仏壇の障子を少し大きくしたくらのものである。こゝを這入ると二畳敷の合天井になつて居る。合天井には施彩の模様がある。左手は壁で、上に香玉形に格子附の突きあげ窓があり、右手はそれに面して、仏壇、その下は戸棚、これには香玉の板戸二枚がついて居る。この戸棚はあけると、水屋の戸棚にゆき抜けになつて居る。道幸とでもいふべき用をします。この二畳の突きあたり右手三尺が引戸になつて、座敷の入り口になります。合天井と

いひ、窓の形といひ、こゝは全く最小の本堂とも見えます。入室前の待合ひにもなるでしょう。

引戸をあけて席へ入るト、こゝは洞床三畳敷で、床は這入つて右手にあります。床柱は全体に虫くつた古材ですが、材は何とも私には定めかねます。この柱には限らず、すべての用材が、何か寺などの古材を拾ひ出して用ゐたものらしく、トいつて格別金にあかしてといふのではない。いはゞ古着をうまく洗ひ張りして仕立て直した、トいふ程度の好みで、そこに圓朝らしい細かな趣味が見えます。

この三畳の座敷に入つて、左が例の洞床、右が押入。正面は窓になつて、水屋への口は押入の脇について居ます。この押入のそばの古い桐の丸柱には、線状の模様彫つてある。どうも仏間の古材らしい。この座敷は普通茶席の式にはすこしも従つて居ない。素より茶席として構造されたものではあるまい。トいつて居間でもない。書院でもない。それは茶席としても書院としても、居間としても、書齋としても、してならぬ事はあるまい。が、圓朝が意はこの一間は座禪の淨室であつたらうと思はれる。一体から見て、茶人の好みでなく、僧庵の形である。こゝに三申さんは炬を切つて置かれる。それも至極面白い。禅味茶味要するに一つである。徒らに法則に拘束されるには及ばない。

水屋は板間で、定め通りか、通りでないかは、私はわからぬが、句点マデ棚があり、箆の子があり、棚上は水屋戸棚になつて居る。それと対して右手の下に押入がある。板戸で花鳥の古画が大分煤けて見える。筆者は不明です。この押入が仏間の条下にかいたゆき抜けの戸棚句点マデで、その上の壁は仏壇のうしろに當つて居ます。

座敷の押入襖は、もとは何か摺物の類の張り交ぜであつたのを、修理の時、三申さんがお手のものゝ古経に張りかへられたといひます。その張交ぜの摺り物もとつて置いた筈だが、どうしたかといはれます。左程たいしたものではなく。何か有合せた配り物なぞの摺り物であつたらうと思はれる。水屋の戸棚は、圓朝宛の諸家の手紙が張つてあります。これは本のまゝであるとの事です。

この手紙はあとに付載しますから読み合はして下さるとして。この三坪に足らぬ小屋ながら、句点マデいかにもしつくり納まつて居る。極めて古雅といふではないか。瀟洒なところがある。異材を用ひて奇巧に走らず。茶に落ちず、俗に落ちず、どこまでも三遊亭圓朝が安息のところといふ風趣が見える。こゝ句点マデした結構の上にも、意匠の周到にして、独創の才のあつたのは、圓朝の圓朝たるところであらう。

二、襖の張りませ。

水屋の戸棚の襖のませ張りは、圓朝宛の手紙すべて八通あります。

その一。佐藤栄中が、観阿の墓所、忌日につき記述したもので、これは多分圓朝が観阿について調べる事があつたものと思はれる。これは「二葉町様。栄中」とあれば、圓朝が本所に住居の折である。この栄中といふ人は、どういふ人か私は知らぬ。圓朝の茶友中村忍（菅野序鶴）が、会席付けには、栄中が正客で圓朝圓橘など同席が見え^{（句点マテ）}。又は栄中が亭主の事も見える。圓朝の先輩であつた茶宗匠であつたものと思はれる。

当時の芸人には茶を修養の一としたものがあつたので、序鶴の会席付けを見ると、菅野序遊^{（句点マテ）}、圓朝、圓橘、柳枝、圓馬などの名が散見される。圓朝の座作に納まつたところのあつたのは、禪もあつたからであらうが、茶事の嗜みが深かつたからであらう。圓朝はこの序鶴のために函根宮の下へ「しのぶ塚」を建てて居ます。（郊外三卷ノ三を参照）

その二。山岡鉄太郎からの手紙。これには北海道行についての用向きがしたゝめて「三遊亭無舌居士。山岡鉄太郎」とある。鉄舟と禪についての交りが深かつた。恕軒のかいたところに拠ると、圓朝の兄は僧であつたとある。禪については天龍寺の滴水の指導をうけて徹底したところがあつたといふ。

その三。田辺蓮舟から。有名会の発起についての招き。これは「圓朝君。田辺」とある。

その四。福地桜痴から、亡母の十三年忌につき心ばかりの茶飯を焚き、親類を招くにつき、老兄の一席是非とも相願候とある。これは「三遊亭老兄。池のはた福地」とある。

その五。成島柳北からの一通。これもさる珍客有之候間御くり合せ、弊屋へ御出下されましくや此段相願ふとある。これには「圓朝さま。柳北。」とある。

その六。日本銀行総裁裁川田小一郎からの一通は「小生も先頃より色々むしゃやくしやと楽しまず候所、今日は久し振りの日曜に付、はし本なり出かけ鬱を晴し申度、例のおしめ連を誘う筈に致し居候間、もし御さし間も無之候はゞ昼前よりお出かけ被下ましくや、右御相談までとあり^{（マテ）}」。このおしめ連とは、吉原芸者おしめの連衆であらうと、草紙庵さんはいはれる。それには「新宿翁。新小川町」とある。

川田は圓朝大臈履で、師匠師匠と尊敬し、遂に新小川町の邸内の隠居所へ移らせた。が、圓朝は川田が家賃をとつてくれぬのを心苦しく思ひて引払つた。すると馬越恭平氏が同じく臈履の一人であるので、これが又芝横川町の邸内へと引越させた。圓朝はこれも同様無家賃なのに、こゝを飛出し、神田から谷中、車坂と移つたが、この車坂で往生した^(句集マ)トある。(関根黙庵著講談落語今昔譚に拠る)

圓朝が熱海に滞在して新作考案中。たま〜臈履の華族が他の旅館へ来られたので、弟子は圓朝に無断で、その機嫌伺に行きしをあとで圓朝が聞き、お前はいつ幫間になつた芸人はお客のお招きにあづかつてから参上するもので、そんな余計な事をするものではないと叱つたとあるが^(句集マ)(同上講談落語今昔譚に拠る)川田が圓朝に対するに、新宿翁を以て推し^(句集マ)桜痴、柳北、蓮舟皆な友人として親しんで居る。圓朝の風格がたゞの芸人とその類を異にして居るものが想見される。

その七。安田善次郎からの招きの一通である。それは浜町梅屋敷常盤楼で開宴には門弟一名と定刻御来席被下度御願ひ申すとあり、その末に、「過日横網弊荘に御来席御願申上候節は、振合ひを不存候処より、甚だ不行届きの取計致し候段、赤面の至、改め近日面謝可致候」とある。定めし謝儀などゆきちがひであつたらうが、安田らしい取計ひが想ひやられる。これには「圓朝先生几下。安田」とある。先生扱ひは少し改まり過ぎて居る。

その八。「金」と署せしもの一通、これは何人であるか不明である。茶の友などなるべく思はる。この張りませのうちに加へたからは、相応の人であらう。¹⁵

小泉策太郎と岡野知十の関係は、具体的にはわからないが、策太郎は知十の一周忌に刊行された句集『鶯日』乾坤(昭和八年)に序文を寄せ、「余知十と交ること四十年になむなむとせり」と述べている。同書には、「柯蔭精舎に、圓朝の故宅を一見す」と前書して、「燈籠が一つはほしや虫聞かむ」(坤の巻)を収めている。これは圓通堂を取材したときの句と思われる。知十と小村雪岱の関係も判然としないが、『鶯日』見返しの紅梅図は雪岱によるものである。また、「雪岱系がく『郊外』の表紙に」として「立つ秋のすらりとうしる姿かな」(坤の巻)、「雪岱筆腕久画賛」として「みだれても狂ふても菊の匂ひかな」(同)の句がある。

三 圓通堂再発見

行方のわからなくなっていた圓通堂が石川県金沢市に現存することが明らかになったのは、昭和五十五年のことだった。七月十一日付毎日新聞夕刊の記事の一部を引用する。

この禅室の行方を突き止めたのは「藤浦富太郎さんを囲む会」会員で郷土史家の窪田孝司さん。きっかけは西ドイツ大使館職員、古池さんからの情報。古池さんがたまたま大使館の古い資料を整理していると「昭和二十九年、円朝の禅室は石川県石川郡湯涌谷村（現・金沢市）の康楽寺に移す」という意味の文書が出てきた。¹⁶

古池さんからこの話を伝えた窪田さんは、さつそく金沢市教委と連絡をとり、康楽寺の所有者、桜井能唯さん、兵五郎氏の甥をさがし当て、円朝の禅室が康楽寺にあることがわかった。

康楽寺は桜井さんが経営管理する、加賀藩の武家屋敷などを集めた「江戸村」の中。

桜井さんの話では、昭和二十九年ごろ、東京・麻布の桜井邸が他人の手に渡るとき、数寄屋造りの禅室をなぜか手放すのが惜しくなり、解体して運んだ。約十年間は気にもとめず、倉庫に保管していたが、昭和三十八年ごろに康楽寺の庫裏にそのままつなげる形で復元したという。その禅室は三畳に二畳の控えの間、屋根は小さなカワラぶき、柱の表面には彫りものがあり、板戸も美しいトリの絵で彩られている。

「あの禅室が円朝のものであることを知っているのは恐らく私一人でしょう。円朝といっても北陸では、それほどピンと来ませんし、とりたてて言うこともなく、そのままにして一般公開しておりません」と桜井さんは語る。

「伝三遊亭圓朝無舌居士遺愛茶席見取図 湯涌温泉江戸村康楽寺附属 昭和五十五年七月」（図10）は、金沢市へ移されてからの圓通堂の内部を示す唯一の資料だろう。¹⁷

この間の事情を、窪田氏を通じて提供された古池氏のメモなどによって補足する。ドイツ大使館は永田町にあったが、戦後日本政府が国立国会図書館の用地に使用したいということから、代替地として提示されたのが現在の場所（港区南麻布四一五一〇）である。¹⁸ その際、

前所有者である桜井家が移設する物件等のリストがあり（注16参照）、そこに含まれていたのが圓通堂である。建物の中には美術品と思われるものがあり、桜井家では圓通堂をその保管場所にしていたようである。

窪田孝司氏が所蔵する見取図の作成者については、確証が得られない。「無舌居士」という呼び方から、山岡鉄舟や圓朝に強い関心のあ
る人物が想像されるが、身近に圓通堂を見ていなければ、短時日に詳細な図を書くことは難しいと思われる。桜井能唯氏によるものではない
かと考えている。

傳

三遊亭圓朝無古居士遺愛茶席見取圖
湯涌温泉 江戸村康楽寺附屬

昭和五十五年七月

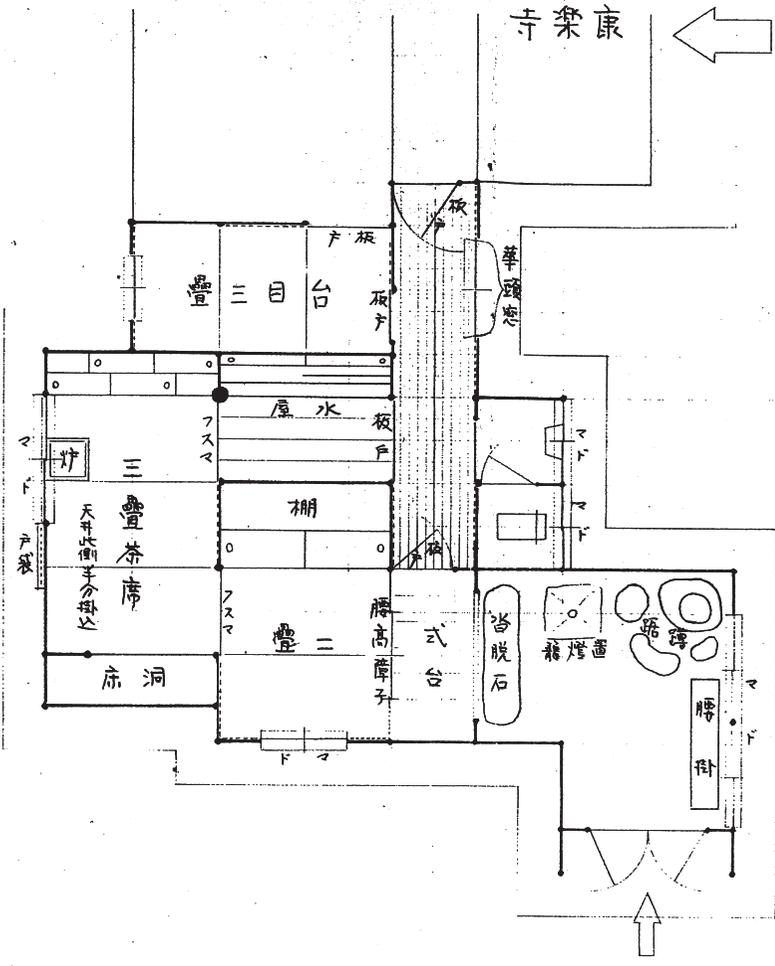


図 10

注

- 1 例えば、芸能史研究家の山本進氏は、「近年、圓朝を『落語中興の祖』と呼ぶ向きがあるが、圓朝の直前に落語が衰微していたわけではない。『中興』の名は、鹿野武左衛門以後百年の沈滞を払拭した立川焉馬にこそ与えられるべきで、圓朝の場合は『近代落語の祖』とも呼ぶほうがふさわしいと思われるが、いかがであろうか」（『図説落語の歴史』河出書房新社、平成十八年）と述べている。
- 2 小島貞二『圓朝と圓通堂』（『大衆文芸』第五十八巻第六号、平成十年七月）
- 3 『圓朝全集』第十三巻（春陽堂、昭和三年）所収。春陽堂版のほか、『三遊亭円朝全集』第七巻（角川書店、昭和五十年）にも収められている。
- 4 永井啓夫『新版三遊亭円朝』（青蛙房、平成十年。元版は昭和三十七年刊）。
- 5 諸芸懇話会・大阪芸能懇話会編『古今東西落語家事典』（平凡社）平成元年
- 6 『圓朝考文集』は、『圓朝顕彰会々々長藤浦富太郎氏を囲む会』の発足を記念して刊行されたもので、窪田孝司氏の編集により昭和五十二年までに七冊発行された。限定二百部の非売品。ほかに、藤浦富太郎の文章ばかりを集めた『随録三遊亭圓朝』正続がある。
- 7 注4に同じ。
- 8 注4に同じ。
- 9 以下、圓通堂の内部と戸棚の襖に張り交ぜにしてある圓朝宛の書簡八通を紹介しているが、次に載せる「圓朝の禪室」と重複するので省略する。なお、「圓朝の禪室」が発表されたのが大正十五年九月、「圓朝遺聞」を収めた『圓朝全集』第十三巻の刊行が昭和三年一月で、「圓朝遺聞」がやや遅れるが、後者が前者を参照していたかどうかは触れるところがない。全集巻末の「圓朝全集の編纂を終りて」には、「小泉策太郎氏が多忙中をも顧ず圓通堂の一覽を許された」とある。
- 10 書画や仏像などのコレクションについて、手近なものでは小島直記『小泉三申一政友会策士の生涯』（中公新書、昭和五十一年）に触れるところがある。
- 11 『東京人』第二十二巻第十号（平成十九年九月）は「三遊亭圓朝」の特集を組み、「圓朝コラム」の中で、圓通堂と明記はしていないけれども、ドイツ大使館に現存する東屋を「圓朝の茶室（禪室）」として紹介している。しかし、これは圓通堂とは別のもう一棟の茶室である。恐らく、「ドイツ連邦共和国大使館一庭とその歴史」（同大使館発行）というパンフレットに、「明治の落語家で名人と称された三遊亭圓朝の有名な茶室（禪室）もこの庭の一角に置かれていた。茶室風の東屋は今も普通りの場所にある」とある記事によつて混同が生じたのだろう。
- 12 古池好氏の教示による。
- 13 『粹興奇人伝』は、『日本小咄集成』下巻（筑摩書房、昭和四十六年）に翻刻がある。
- 14 知十は、文中で「明治十四年頃でありましたらう」と述べているが、十九年が正しい。知十の三回忌に刊行された『味餘』（昭和九年）に載る、俳人大島宝水（明治十三年〜昭和四十六年）の作成した年譜には、明治十六年の条に「函館新聞（後ち函館毎日新聞と改称）に佐藤鉄圓の後を継いで主筆となり」、二十一年の条に「二月 函館より帰京」とある（十七年から二十年までは記事がない）。なお、この部分は『新版三遊亭円朝』に紹介されている。

- 15 「圓朝遺聞」では、同様の文言の後に、「或は金子堅太郎氏ではないかといふ説もある」として、根拠は明らかでないが政治家金子堅太郎（嘉永六年（昭和十七年）の名を上げている。
- 16 古池好氏の教示によると、「大使館の古い資料」はドイツ外務省から取り寄せたファイルの中にあつたもので、「康楽寺保存物品」と題する手書きの一覧表の写し。日本国政府と前所有者の交渉の過程で交わされたものと推定され、その写しを日本国外務省が大使館に参考資料として渡したのではないという。なお、この文書は使用後に本国へ返却されている。
- 17 永井啓夫氏の教示によると、平成五年頃に調査した際、襖の張り交ぜにした書簡は既に残っていなかったという。なお、永井氏は平成十八年に死去。
- 18 この用地については、日本政府が取得した後、ドイツ連邦共和国政府が購入（契約は昭和二十九年五月）しており、ドイツ大使館と前所有者（桜井家）の間に直接の売買関係はない。